関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

[翻訳] エラスムス著・『幼子イエスについての説教』（翻訳・1）

その他のタイトル	Desiderius Erasmus, Concio de puero Jesu (599.C 1.-604.A 9)
著者	中城 進
雑誌名	教育科学セミナリー
巻	30
ページ	75-86
発行年	1999-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00019427

エラスムス著・『幼子イエスについての説教』(翻訳・1)(1)

ロッテルダムのデシデリウス・エラスムス(2)
【翻訳：中　城　　進】

この論文は、ロンドンでジョン・コレット(3)によって設立された新設の学校において子供によって朗読されるべきものであって、幼きイエスの似姿を守り、その観念を示すためのものであります。

子供たちのなかの一人の子供について、つまり幼子のイエス様のことについて、表現し難いものがあるのですが、言葉にしてみようと思います。私は、ツゥリウース(4)の雄弁さを求めてはおりません。それは瞬時の空虚な享楽で耳を魅了するものです。実際に、どれほどまでに、キリストの知恵は現世での知恵と相違していることでしょうか（さらに、それらには測り知れないほどの違いがあるのです)。キリスト教徒の雄弁さと俗人の雄弁さとは大いに異なったものであることは当然のことです。とにかく、私と共に、最上の御方であらせられるイエス・父・神に対しまして、お祈りを捧げるように努めることを私は望んでおります。その御方は、あらゆる善きものの総体が由来している始原のような御方であるのです。そして、その御方は、その御方の霊のみによって子供の弁舌を豊かなるものとして、流暢な朗読を子供に行なわせることになるのですし、また乳児の口から完全な賛美を慣れたように引き出すことすらもあるのです(5)。私たちは、私たちのすべての生命活動において、私たちが言明しようとしている御方自体、つまりイエス様のことなのですが、とは別の者に関しての描写を行なうべきではありません。それ故に、私たちの陳述は、その御方を理解するものであり、その御方を写し出すものでもあり、またその御方で満ち溢れたものでもあるべきです。その御方は父の言葉であるのです。また、その御方のみが命の言葉を有しているのです(6)。その御方の説教は、生命に溢れてまた生き生きとしているので、どのような両刃の剣よりもさらに心の奥底の深いところまで深々と貫き通すこととなるのです(7)。しかもなお、その御方の、その腹から命の水が流れ出ることが予言されております(8)。私たちの声という器官を通して、それはあたかも水道管のようなものとしてであるのですが、あなた方のすべての魂の中に命の水を流し込み、天国のおびただしい喜びの命の水で溢れさせることを、その御方は拒まないでしょう。私には確信があるのですが、私の最も愛すべき仲間たちよ、敬虔なる清らかなお祈りに、なお加えて、耳を本当に待ち焦がれた状態にしておくことです。確かに、その耳をです。福音書において、永遠なる御言葉が私たちに命じているのです。「耳のある者は聞くがよい」(9)とその御方は言われるのです。いったい何の理由をもって、私たちはこの困難なことを求めないということがあるのでしょうか。やはり、確かに、それは敬虔なる求めであるのです。特に、神様と共にあって自らを救う時には、そのような求めが必要なのです。それ故に、死すべき無能なる者は強き者となることができるのですし、また自身の能力に頼ろうとしている者は弱き者となるのです(10)。そのこと故に、パウロ(11)は自身がすべてのことを成し遂げることを誇っているのです(12)。しかし、確かに、激しい熱狂さをもって自分たちの世俗の支配者に対して燃え立つ時があるのですが、つまりこの

ことは悪魔の軍隊に登録しているということなのですが、その際に各人はそれぞれの支配者に称賛を行なってしまいます。しかし、私たちの教師であられ、私たちの保護者でもあられ、私たちの指揮官でもあられるイエス様よりも、私たちにとって、優れているものとは、またそれ以上に私たちが負債を負っているものとは、いったい何が有り得るというのでしょうか。その御方は、確かに、すべての者にとっての支配者であられるし、しかもなお特別に私たちの支配者であられ、また子供たちの君主でもあられるのですから、私たちは競い合うようにして敬虔にその御方を称揚するべきではないでしょうか。まず何よりも、私たちはその御方を知ることを熱心に求めましょう。その御方を知ることで私たちはその御方を称賛することとなり、その御方を称賛することで私たちはその御方を愛することとなり、その御方を愛することで私たちはその御方を真似しまた模倣することとなり、その御方を模倣することで私たちはその御方を享受することとなり、その御方を享受することで私たちは不滅の至福へと到達することとなるのです。

しかし、多産であって、また無限でもある、豊饒な題目のなかで、私の論説は、何処から開始を行なって、またどの点で終局を見い出すべきでしょうか。私が話そうとしている御方とは（真実に言うのでありましたならば）、あらゆる善の始原であり、また大海原であるのです。本当に、本性上、その御方自身は把握されるものではありませんし、また無限であるのです。しかしながら、その御方は狭められたものとして、狭きものの内にご自身を閉じ込めるかのようにしてあるのです(13)。同様に、私の論説はその御方の称賛すべきことを説明するのですが、それらについての制限を認識してはいないのですが、それにも拘らずその御方自身への称賛すべきことを限定しなければなりません(14)。確かに、三つの重要な事柄があるように私には思われるのですが、それらは生徒たちや兵士たちの心を熱狂させて行なわせることを焚き付けるものであるのです。つまり、それらとは、支配者への賛嘆、支配者の愛、支配者の寵遇であるのです。それ故に、私たちの教師でありまた支配者としてのイエス様に(15)、熱烈さをもって学ぶことを、私たちは志すのです。それでは、それらのことに関して、一つずつ、敬虔さと知識欲とをもっての考察に着手いたしましょう。第一には、どれほどまでにあらゆる点においてその御方が仰ぎ見られるべきであるのかということに関して、あるいはどれほどまでにその御方を驚嘆すべきであるのかということに関してです。次には、どれほどまでにその御方が尊敬を受けるべきであるのかということに関して、またそれ故にその御方を模倣するべきであるということに関してです。最後には、どれほどまでにその御方が大きな愛情という果実であるのかということに関してです。

［第一の部分］(16)

実際、このような論述における修辞学者の方法とは、卓越した高貴の出の支配者の模範を扱うという方法です(17)。当然に、そのような論述の方法が称賛を高めようと試みられている者をさらに高めていくことになるのです。本当に、私たちの支配者は、人間の最高位の高さにいる者よりも優っているのです。つまり、それは、いかなる者でもまたどれほどまでに栄誉を持つ者であっても、ということです。彼らは光ではなく暗闇を引き入れているのです。すなわち、光り輝く誕生の御方々でも、イエス様の側と比較してみれば、煙であるかのようなものとして見なされることはないでしょうか。確かに、その御方のことについては言い表し難いし、やはり決して理性で想像できるものでもありませんし、神様からの神様でありますし、常に時を越

えてお生まれになっておりますし(18)、永遠の最高位の父とすべてのことにおいて同等ではないのでしょうか。しかも、人間としてのその御方の誕生さえもが容易にすべての王の栄光も暗闇にしてしまうのではないのでしょうか。確かに、その御方の誕生に世界が驚いたのです。父親の代理人として、聖霊の霊息によって、婚姻の天使と共に、男の行為なしに、処女の中の処女に天来的な受胎によって、丁度よい時に人間として生まれて来たのです。もちろん、それに対して、その御方は、人間として生まれて来たのですが、神であることを放棄することはありませんでしたし、また私たちの汚れの何かをほんの僅かたりとても持ってはおりませんでした。さらに、また、その御方は、すべてのものに内在しており(19)、それにも拘らず何処の場所にも決して制限されることはなく(20)、ご自身を無限のものとして保ち続けているのですが、そのような御方よりも以上に何が偉大なものとして表現され得るというのでしょうか。その御方は、すべての善きものが現出するところの最上の善きものであられるのですし、しかもなお自らが減少することが有り得ないものでもあられるのですが、そのような御方よりも以上に何が豊かなもので有り得るというのでしょうか。その御方は、父親の栄光という光輝を有しておられますし(21)、またこの現世にやって来られて、ただ一人ですべての人間に光を与えておられているのですが、そのような御方よりも以上に何がさらに秀でたもので有り得るというのでしょうか(22)。その御方は全能の父によって天国や地上においてすべての支配権を委任されているのですが、そのような御方よりも以上に何が支配的な力を有し得るというのでしょうか(23)。その御方は、全世界をたった一度の指図でもって創造し、その命令をもって海を静かにさせ(24)、事物の形状を変化させ(25)、病気を消し去り(26)、武装した男を倒し(27)、悪魔を撃退し(28)、大地を従わせ(29)、岩を裂き(30)、死体を生き返らせ(31)、罪人を悔い改めさせ(32)、さらにすべてを新しくするのですが、そのような御方よりも以上に何が創造的で有り得るというのでしょうか。その御方は、天上界を驚嘆させ、地下界を身震いさせ、それらの中間にあるこの世界を懇願させまた崇拝させ、またその御方と自分とを比較することによって最高位の地位にある君主を“自身は単なる小さな昆虫でしか過ぎない”と是認させてしまうのですが、そのような御方よりも何が崇高なものとして有り得るというのでしょうか。その御方は、他の者の死を完全に征服しておられるし、それにご自身の死をも征服なされておられるのですが、また悪魔の僭主を神の力で破壊されてもおられるのですが、そのような御方よりも以上に何が強力で不屈なものとして有り得るというのでしょうか。その御方は、地下界を打ち砕きまた略奪しますし、そのように多くの随行する魂と共に勝利を天界にもたらしますし、また父なる神の右側にお座りになられているのですが(33)、そのような御方よりも以上に何が勝利を収め得るべきものとして有り得るというのでしょうか。その御方は、驚嘆するべき知識をもってすべてのものを創造し、小さな蜂でさえもそれほどまでのその御方の偉大な知恵を奇蹟としてその中に残しておりますし、驚くべき秩序と調和とをもってすべての事物を組み合わせ、結合し、管理しておりますし、またそこからご自身を退かすことをしないままですべてを行なうのですが、つまりご自身を動かさないですべてのものを動かし、ご自身を平静にしたままですべてのものを恐れさせもするのですが、そしてその御方の最も愚かな部分でさえもがすべての死すべき人間の賢者の知恵よりも遥かな差異をもって上位にあるのですが(34)、そのような御方よりも何が賢明なものとして有り得るというのでしょうか。その御方は父なる神によって分別のある証人として公然と遣わされているのです

が、そのような御方よりも以上に誰が尊敬するべき権威であらねばならないと私たちには言い得るのでしょうか。「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。これに聞け」(35)。その御方はすべてのものを明瞭に見る眼をお持ちになっておられるのですが、そのような御方と同等に何が尊敬し得るべきものとして有り得るというのでしょうか。その御方のみが魂と身体とを冥府へと送付することに同意することができるのですが、そのような御方と同等に何が恐れ得るべきものとして有り得るというのでしょうか(36)。その御方の眼差しは最上の豊饒さであると見做されているのですが、そのような御方よりも以上に何が美しいものとして有り得るというのでしょうか。最後に、もしも古代人に高き価値を与えるのでありましたならば、その御方は始まりを持たずまた終わりをも持たないのですが、そのような御方よりも以上に何が古きものとして有り得るというのでしょうか。

しかし、恐らくは、子供としての私たちが一人の子供に驚嘆してしまうことは、至極当然のことだと言えるのです(37)。というのは、この驚きのために、その御方は何処であろうと現れるのです。その御方の最下のものは、絶えず、人間の最上のものよりも以上に高くあるのです。その御方は泣きわめく赤ん坊となられましたし、ぼろぎれに巻かれてもおりましたし、また飼葉桶の中に寝かせられてもおりましたが、それでもその御方はなんと偉大であったことでしょうか。天国の天使は賛美し、羊飼いは崇拝し、その御方の母も同様に崇拝したのですが、野獣の生き物も認識し、星は告げ知らせ、博士たちは崇敬し、ヘロデ王は恐怖し、エルサレムのすべての人びとは身震いし、聖霊の宿るシメオンは抱擁し(38)、アンナは予言し(39)、そして敬虔なる者は救済の希望を持つようになったのです(40)。ああ、なんと謙遜した崇高さであられることでしょうか、またなんと崇高なる謙遜であられることでしょうか。もしも私たちが新しきものに驚嘆させられるというのでありましたならば、これと同様のことが他に何がかつて行なわれたり、うわさになったり、また考えられたりしたことがあるのでしょうか。もしも私たちが偉大さに嘆賞させられるというのでありましたならば、私たちのイエス様よりも、どのような方法を用いて、何が強大であるというのでしょうか。その御方を、どのような被造物でも言葉で表現できないし、また思考をもって推論することもできないのです。その御方のこのような偉大さを主題として把握することに取り組むことは、盃で限りなき広大な大海を汲み出すというような非常に困難なことを試みるようなものであって、さらに愚かなことを行なうことになるのです。その御方の無限性は、説明されるよりも、崇拝されるべきものであるのです。私たちに理解できない以上は、私たちはその御方をさらにもっと驚嘆するべきであり、それが至極当然のことであるのです。何が私たちにそのようなことを実行できなくさせているのでしょうか。その御方の履物の紐を解いたという、その御方の優れた先駆者(41)は、取るに足りないことを誇っているのでしょうか。それでは、いざ、最も好ましき子供である方々よ、この周知の子供を、つまり教師としてのイエス様のことなのですが、またその御方は突出なされた指導者でもあられるのですが、私たちは自負心をもって神聖なるその御方を誇ろうではありませんか。その御方の崇高さは敬虔さを求めている私たちに自信を与えるのです。私たちはこのような自分自身だけを気に入ろうではありませんか。しかし、それは、その御方が私たちと共有しているすべてのものに私たちが気付いた場合だけに限られています。私たちは自身を良きものとして信じようではありませんか。しかし、それは、同様に、この世界とか悪徳、悪徳とは最も不名誉なものであるのですが、という主人に奉公することに

なっても、同時にそのように優れた支配者に献身することがあるという場合だけに限られています。

［第二の部分］

しかし、悪魔によってさえも私たちは驚嘆させられますし、また身震いさせられもするのです(42)。愛は敬虔のみによるのです。第二のこの論説の部分は、さらに、私たちに近接して関係しているものであるのです。それ故に、注意深く聞き耳を立てて聴くことです。すなわち、それは私たちがイエス様を愛する理由についての話であるのです。つまり、それはその御方の愛に対するよりも以上の私たちの愛をもって返すという理由についての話であるのです。その御方は、私たちがまだ創造されていない時に、すべての時間が始まる以前のことですが、私たちをその御方の内部にて愛していたのです(43)。その際にも、既に、すべてのものがその御方の内部では存在していたのです。そして、その御方の本来的な善さでもって、私たちが全く何も存在していない頃に、その御方は私たちを創造なさったのです。その御方は、各々の生き物だけではなく、人間をも創造なさったのです。その御方は、ご自身の似姿をもって人間を創造なさったのです。これは最高に善きものを入れるのに適したものであるのです。その御方は、そのお口から、神聖なる生命の息をその中に吹き込んだのです。しかもなお、このことに加えて、その御方は、被造物に対して、私たちの支配に服従するようにと命令しているのです。いやそればかりか、さらに、その御方は私たちを監督するための天使を配備しておられるのです。また、その御方は、お造りになられたこの広大で美しき世界を、私たちが使用するためとして私たちに与えたのです。その御方は私たちを全くもって称賛すべき劇場の内にあるかのように配置しました。それ故に、私たちは、万物の創造における創造者の賢明さに対して驚嘆し、その善さを愛し、またその力を崇めるべきであるのです。また、その御方は、人間をお造りになったのですが、さらに人間の精神にこのような多くの賜物を備え付けておられるのですし、また洞察力のある本性という輝きをも備え付けておられるのです。この生き物よりもさらに驚嘆しまた豊饒である被造物とは、いったい何が有り得るというのでしょうか。しかし、ああ、豊饒さには、常に、嫉妬という同伴者があるのです。さらに、狡猾な蛇によって、人は罪に陥れられることになるのです。再び罪を犯した者は、無よりも以上に、嫌忌すべきものとなるのです。

とにかく、ここでさらに、貴方様、つまり最上位のイエス様に対して、向かうことに致します(44)。どれほどに多くの言うに言われぬ熟慮でもって、どれほどに多くの未聞の先例でもって、またどれほどに多くの比類なき愛情でもって、貴方様は和解を行なったことでしょうか。すなわち、貴方様は、死ぬことでほぼ救済されるということによって、私たちを復活させて下さるのです。人の罪は不合理さをもって豊饒と呼ばれることはありません。私たちはすべてのものを創始者に負っているのです。しかし、私たちは救世主にはすべてのもの以上のものを負っているのです。貴方様は、貴方様の父の王国から追放の地としてのこの私たちの世界へとご自身を現して、ご自身を自発的に低きものとなされておられるのですが、それは、楽園から私たちは追い出されたのですが、貴方様がそのような私たちを天国の市民になさっているがためであるのです。貴方様は私たち人間の肉塊をもって出現しているのですが、それは貴方様が貴方様の神性を共同のものとして私たちのものとさせるためであるのです(45)。貴方様は私たちのこの汚れをお着になられるのですが、それは貴方様が不滅の栄誉を私たちに着せるためであるのです(46)。貴方様は私たちの姿でもって被い、また

私たちと共にこの災禍に満ちた世界に多数の年間に渡って居住することを欲しましたが、それは貴方様が貴方様の愛に私たちを魅了するためであったからです。貴方様は、光をあらわに出されますし、無論のことですが暗闇をも出現させます。そして、貴方様は、私たちと共にあって、私たちのために、鳴き声をあげたり、喉の渇きを覚えたり、空腹を覚えたり、寒さを感じたり、暑さを感じたり、辛さを覚えたり、疲労をしたり、熱望を覚えたり、眠気に耐えたり、また断食に耐えることを引き受けました。貴方様は多くの罪深き不幸である私たちの状態を欲せられましたが、それは貴方様がすべての不幸から私たちを自由にさせるためでもありましたし、また貴方様と、つまり最上の善き貴方様と、共にあることを与えるためでもありました。さらに、貴方様の真面目で神聖なるすべての生涯によって、模倣という効力をもって私たちの精神は火を着けられるのではないでしょうか、有益な教えでもって私たちは教えられまた形成されるのではないでしょうか、驚くべき奇蹟をもって私たちの目は覚まされるのではないでしょうか、忠告という魅惑をもって私たちは引き寄せられるのではないでしょうか、また確実なる約束でもって私たちは勧誘されるのではないでしょうか。それは、貴方様よりも他に適正なる道がないのですし、貴方様ご自身の外にはその道はないからです。貴方様こそがただ一人の道であり、真理であり、命であるのです(47)。つまり、貴方様は、その生涯を明らかにしただけではなく、路を開いたのです。貴方様は、私たちのために、縛られ、引きずられ、拒絶され、嘲笑され、叩かれ、唾を吐きかけられ、殴られ、恥辱を加えられて、遂には祭壇の十字架で、汚れなき小羊のように犠牲となることを欲せられました(48)。それは、貴方様が、貴方様の縄目でもって私たちを解き放ち、貴方様の傷でもって私たちを治療し、貴方様の血でもって私たちを洗い流し、また貴方様の死をもって私たちに不死をもたらそうとしていたからです。要するに、貴方様は貴方様のすべてを私たちのために犠牲にして下さっているのですが、それは、もしも可能となるのでありましたならばということですが、貴方様の犠牲によって私たちの堕落を救うためであるからです。生命の復活によって、貴方様は何度も弟子たちの前に出現なさいました。それは、彼らの眼差しの前で、お父上様のところへと帰還するためであったからです。つまり、頭領が本当に先に行かれることを弟子たちが認めることによって、その場所に自分たちも到達することになるということをそれらの弟子たちが確信するためでありました。さらに、貴方様は、貴方様の同伴者たちと貴方様のお父上様との間での和解を行なおうとする際に、非常に強固な支持をなされたのですが、それは貴方様の栄光に満ちた永久の愛という貴方様の保証を贈って下さるがためでありました。その保証とは神聖なる聖霊であるのです。この世界での死によって、私たちは、久しく、真実と豊饒さをもって、貴方様と共に本当に生きることになるのです。それは、私たちが私たちのこの世界での精神をもって生きるよりも以上のものであるのです。このような最高の愛という論拠に対して、付け加えることができるものとしては何を私たちは求めているのでしょうか。非常に多くのことについて論及しましたが、貴方様の私たちに対する最高度の激烈なる愛を十分に論じ尽くしたのかと言えば、これらの論及でも決して多くはないのです。その殉教者(49)の死によってどれほどに多くの者がその軽蔑すべき生命を活かすようになったのかを、その処女(50)の模範によってどれほどに多くの者が貞潔へと向かうようになったのかを、創造者(51)の記録(52)によってどれほどに多くの者が敬虔さへと駆り立てられるようになったのかを、また貴方様の教会の驚嘆すべき秘蹟によってどれほどに多くの者

が許されまた同時に豊かなるものとされたのかを、いったい誰が実際に完全に想起することができ得るというのでしょうか。それは貴方様が私たちを慰め、励まし、守り、教え、戒め、引き寄せ、駆り立て、動かし、また貴方様の秘密の著作で私たちを変形するためであるのです。或る人びとの前において、貴方様は貴方様の生命の煌めきを隠すことを望まれておりました。偉大なる愛を激しく燃え上がらせている貴方様が、そのようなことを望まれたのです。それは或る者の敬虔さと誠実さの検査を試されている場合だけであるのです。要するに、貴方様は到る所で私たちと出会われているのですが、それは貴方様のことを私たちが忘れられないようにするためであるのです。その上に、貴方様は、父親のように罪人たちに耐えておられますし、また貴方様に復帰しようとする者たちを慈悲深く受け入れておられるのではないでしょうか。貴方様は、貴方様のご利益を数え上げないし、無報酬のままであり、また私たちの改心に対して私たちの悪行を数え上げることもありません。貴方様は、繰り返して黙したままで叱責し、また仄めかしをもって引き寄せるのではないでしょうか。逆境によって正すのではないでしょうか。繁栄によって誘うのではないでしょうか。すべての者に石を投げることを止めさせるのではないでしょうか(53)。貴方様の熱烈なる愛情は、私たちを抱き、守り、保護し、また祝福を与えるのですが、それが停止されることは決してありません。

しかしながら、戦友たちよ、私たちは無数の事柄のうちのほんの僅かな事柄だけを手短に触れているだけにしか過ぎない、と思いませんか。そして、それにも拘らずに、あなたはこのような尽力の堆積が測り知れないものになるということも認識されていることでしょう。ところが、或る者は、ピュラデス(54)やオレステス(55)やペイリトオス(56)やテセウス(57)やダモン(58)やピュティア(59)のような勲章を飾り付けるかのような空言を言い広めようと欲します。このような話はこれらの人びとに比べると駄弁でしか過ぎないのです。その上に、その御方はこれらのものを与えましたが、その御方の方へと私たちは何もお返しするものはありません。確かに、私たちは、裏切り者であり、また敵対者でもあるのです。その御方に借用したすべてのものに対しての利益を、私たちは何も返すことができないのです。もしも人間がほどほどの好意的な行為を受けることによってその相手の人間への愛を促進されるというのであれば、この創始者や救世主の愛情や功績に対して、私たちはせめて少なくとも愛し返すことぐらいはできないものでしょうか。その御方は、私たちへの恩寵に対して、私たちに返還の要求をするべきであるのです。それにも拘らず、その御方は、ご自身にではなく、それを私たちの収益として注ぎ返して下さるのです。鋼鉄は、山羊の血液に触れると、柔らかくなります(60)。鷲、獅子、豹、海豚、そして蛇は、利益を認識し、また返報します(61)。ああなんと、未聞の愛情をもって柔らかくされていない場合には、人間の心は鋼鉄よりも堅くあることでしょうか。ああなんと、善行が忘れ去られている場合には、人間は獣よりも忘恩の徒であることでしょうか。ああなんと、人間は異常なまでに恥知らずであることでしょうか。というよりも、むしろ乱心というべきでしょう。創造され、復活され、祝福され、善行を積み、大いなる希望を喚起するような存在でありましたならば、その御方は、ご自身を越えて何でも愛することができるでしょうし、すべてのものに内在なされているでしょうし、すべてのものを現出させるでしょうし、また私たちにすべてのものを分け与えるでしょう。

さらに、その上に、この愛情はすべての死すべき者を取り巻いているのですが、さらにもっと特別に私たちはその御方に対して負債を負っ

ているのです(62)。それは私たちの子供という特異な状態に対してであるのですが、それに対してその御方は或る程度の関心と慈悲とを有しておられました。その御方は多くの証拠でもってそれを明示しました。まず第一に、予言者の予言が守られて(63)、その御方は赤ん坊という子供として生まれることを欲せられました。その時には、その御方は無限であったのです。さらに、その御方は処女の子宮の内に囲まれて潜伏していたのですが、つまりその御方は未だに生まれていない子供でもあったのですが、その御方は身振りをもってまた歓喜をもって挨拶することを好みました(64)。その後、直ちに、無実である子供たちの血に対して、その御方はご自身の出生を神に捧げることを欲しました(65)。このことは小競り合いのようなものであるのですが、その御方は征服されることのない指導者として戦闘を始められたのです。さらに加えて、その御方が差し迫った勝利の死を迎えてエルサレムへと来られた時のことがあります。子供たちは、その御方を出迎えて、愛らしくその御方にまとわりつきました。その御方は子供たちが自分についての賛辞をもって歌うことに対して好意を示しました(66)。実際、確かに、その御方は、子供たちを愛し、また心配する保護者でもあるのですが、次のように振る舞いました。母親たちが自分の子供たちを連れて来て、イエス様との接触によって聖化されることを望みましたが、弟子たちは子供たちが近付くことを許しませんでした。その御方は、憤って、「幼子たちが私のところに来るままにしておきなさい」(67)と言われました。しかも、その御方は、子供たちを祝福するだけではなく、或る死すべき者には天の王国の門が開かれているということを本当に、確かに、否定しました。しかし、小児のようになって自分を低くする者はそれから除かれているのです(68)。さらに、その御方は愛をもって否定しました。それは、幼き者が躓かされることに対して、厳しく警告した時のことであるのです。そのようなことを行なう者は、これらの小児たちの一人を躓かせるよりも、石の挽臼を首に結び付けられて真っ逆さまに海へと突き落とされる方がより以上に救われることになる、とその御方は断言しました(69)それに加えて、その御方は、子供たちを賞賛に価するものと評して、突出した賛辞を与えました。「真に真に、あなた方に言うが、それらの天使は父の御顔をいつも拝しているのです」(70)。貴方様のあなたは(71)、つまり貴方様に捧げられた多くの者は、教師であられるイエス様に感謝を捧げております。そして、常に、貴方様がその神聖なる御手を私たちに置くことを欲せられることを、またすべての躓から私たちを遠ざけて守って下さることを、私は願います。集まりの中央に子供を置くことによって、その御方がその例を通して弟子たちに提示しているものとは、その御方の大いなる愛の証ではないというのでしょうか。その御方は、「心を入れ換えて、幼子のようにならなければ、天の王国には入ることはできないであろう」(72)と言いました。どのような方法で不死の生命へと達することができるのかとニコデモがその御方に尋ねた時に、同様のことが言及されていたのではないのでしょうか。その御方は、新たに生まれ変わることである、と言明しました(73)。つまり、このことは子供(74)に復帰することであるのです。特に、幼さ(75)は私たちの指導者キリストを喜ばせることになりますので、もしももはや救済の希望が僅かさえもない外部の世界からその世界へと仲間として入ることを許されたいと望むのでありましたならば、老いた者でさえも駆り立てられるかのようにして再び子供になろうとすることです。ペテロ(76)が「いま生まれたばかりの乳飲み子のように、乳を求めなさい」(77)と告げ知らせる時には、その言葉はキリストとは不調和を生じてはおりません。パウロが「わたしの小さな子供たちよ、あなた

がたの内にキリストが形成されるまでは、わたくしは、またもや、あなたがたのために産みの苦しみをする」(78)と言った時にも、その言葉はキリストとは矛盾してはおりません。また、彼は小児にキリストという乳を飲ませました(79)。神秘的な著書(80)の中には、このような事柄が数多く現れております。約言すれば、キリスト教は、再生の他では全く有り得ないし、また言うなれば或る種の再子供化(81)でしか有り得ないのです。

【注釈】

(1)当翻訳において使用されたテキストは、1704年に印刷されたライデン版からの、1962年の復刻版である。

Erasmus, Desiderius, Concio de puero Jesu. Joannes Clericus (Ed), Desiderii Erasmi Roterodami Opera Omnia•Tomus V,Hildesheim : Georg Olms, 1962. 599–610 (599.C 1.–604.A 9).

(2) Desiderius Erasmus : 1469–1536.

(3) Joannis Coleti. 人名と地名はその当時のまたその国での音声での読みで表記することが望ましい。ところが、当時の音声での読みが分からない人名や地名がある。そこで、当翻訳では、原則として、人名や地名の表記はラテン語での読みで表記する方針である。しかし、人名や地名の読みの翻訳が定着している場合には、翻訳者が妥当と認めた限りは、先達の翻訳に従うことにした。彼の場合は英国人のジョン・コレットして邦訳が定着しているので先達の邦訳に従って英語での読みの表記を踏襲した。

ジョン・コレットとは、エラスムスの友人であり、聖パウロ校を設立したイギリス人である。エラスムスは、1509年の夏から1511年の4月頃の期間において、英国のロンドンに居住していた。エラスムスは、その英国での生活の中でコレットと友情関係を結んでおり、コレットの聖パウロ校の設立にあたっては強力を惜しまなかった。『幼子イエス』は、聖パウロ学校の子供たちのために、キリスト教の知識と信仰を深めることを目的として執筆されたテキストである。

(4)ツゥリウースとは、古代ローマの政治家であり雄弁家でもあるキケロ(M. Tullius Cicero : B.C.106–43)のことである。

(5)「イエスは彼らに言われた、『あなたがたは“幼な子、乳のみ子たちの口にさんびを備えられた”とあるのを読んだことがないのか』」(『マタイによる福音書』、以下『マタイ』と略記する、第21章16)。

(6)「あなたの栄光は天の上にあり、みどりごと、ちのみごとの口によって、ほめたたえられています」(『詩篇』、第8篇1～2)。「永遠の命の言をもっているのはあなたです」(『ヨハネによる福音書』、以下『ヨハネ』と略記する、第6章68)。

(7)「神の言は生きていて、力があり、もろ刃のつるぎよりも鋭くて、精神と霊魂と、関節と骨髄とを切り離すまでに刺しとおして、心の思いと志とを見分けることができる」(『ヘブル人への手紙』、第4章12)。

(8)「わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう」(『ヨハネ』、第7章38)。

(9)『マタイ』、第11章15を参照。

(10)エラスムスは、神の声に耳を傾けることの重要性を読者に勧めているのである。神の声に耳を傾けて、神の声を聴き、神の声に従って行動すれば死すべき無能なる者ではあっても強い存在となることができる、ということをエラスムスは説いている。それとは逆に、自身の能力を過信して、神の声を求めて聴こうとする耳がなければ、つまり神の声を希求して聴こうとする精神がなければ、弱い存在となる、ということをもエラスムスは説いてい

るのである。

(11)パウロ(Paulus)とは、新約聖書に登場する人物であり、初期のキリスト教におけるユダヤ人伝道者である。

(12)「わたしを強くして下さるかたによって、何事でもすることができる」(『ピリピ人への手紙』、第4章13)。

(13)神が人間イエスとして受肉した現象に、エラスムスは言及している。

(14)エラスムスは、神に関して称賛すべきことは無限にあるのだが、彼の論説においてはいくつかの事柄に限定して称賛するという方針をここで述べているのである。

(15)原典においては dulci Jesu（愛すべきイエス）と記載されているのだが、前後の文脈を考えるならば duci Jesu（支配者としてのイエス）と叙述する方が良い。それ故に、翻訳者は、“誤植の可能性が高い”と判断して、当翻訳の文章では duci　Jesu（支配者としてのイエス）と翻訳することにした。

(16)原典においては、「第二の部分」という見出しの語は付いているのだが、「第一の部分」という見出しは付いてはいない。読み易さを考慮して、「第一の部分」という見出しを付けた。

(17)原典においては、改行はない。当訳文においては、翻訳者の意志によって、読者の読み易さを考慮して、改行を行なった。

(18)イエスは時を越えて地上世界に誕生し、時間において制限を受けていないものとして、エラスムスは解釈をしている。エラスムスは、イエスにおける時の無制限性に関しての議論を行なっているのである。

(19)すべての事物に神が内在していると、エラスムスは解釈している。

(20)神は場所において制限を受けないとして、イエスにおける場所の無制限性に関しての議論をエラスムスは行なっているのである。

(21)「御子は神の栄光の輝きであり」(『ヘブル人への手紙』、第1章3)。

(22)「すべての人を照すまことの光があって世にきた」(『ヨハネ』、第1章9)。

(23)「わたしは、天においても地においても、いっさいの権威を授けられた」(『マタイ』、第28章18)。

(24)上掲書、第8章23～27を参照。

(25)『ヨハネ』、第2章1～11を参照。

(26)『マタイ』、第8章1～17を参照。

(27)上掲書、第28章4を参照。

(28)上掲書、第8章28～33を参照。

(29)上掲書、第27章45と51を参照。

(30)上掲書、第27章51を参照。

(31)『ヨハネ』、第11章1～44を参照。

(32)『ルカによる福音書』、以下『ルカ』と略記する、第7章36～50を参照。

(33)「神はその力をキリストのうちに働かせて、彼を死人の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右に座せしめ」(『エペソ人への手紙』、第1章20)。

(34)「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからである」(『コリント人への第一の手紙』、第1章25)。

(35)『マタイ』、第17章5を参照。

(36)「からだを殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、からだも魂も地獄で滅ぼす力のあるかたを恐れなさい」(『マタイ』、第10章28)。

(37)原典には、改行はない。当訳文においては、文脈と文章の読み易さを考慮に入れて、翻訳者の意志によって改行を行なった。

(38)『ルカ』、第2章25～35を参照。

(39)上掲書、第2章36～38を参照。

(40)イエスの誕生の際のことは、『マタイ』の第二章と『ルカ書』の第2章が参考になる。

(41)「偉大な先駆者」とはバプテスマのヨハネを意味している。『マルコによる福音書』、以下

『マルコ』と略記する、の第1章1～8、また『ルカ』の第3章3～16を参照。

(42)『ヤコブの手紙』、第2章19を参照。

(43)『エペソ人への手紙』、第1章4を参照。

(44)原典では、改行はない。ここの文章から、執筆者としてのエラスムスが神に向かって語り始めるという形式を採用しているので、翻訳者の意志によって改行を設けることにした。

(45)『コリント人への第一の手紙』、第15章50～54を参照。イエスは人間に神性を付与するために地上に出現した、とエラスムスは解釈している。しかし、『コリント人への第一の手紙』の第15章50の「肉と血とは神の国を継ぐことができない」という件が正しければ、人間への神性の付与とは死を前提としての話であることになる。つまり、この件が正しければ、人間に対して生前に神性が付与されることは有り得ないということになる。ところが、私の疑問は、“生ける人間に神性が付与されることも有り得る”とエラスムスが判断しているのではないかというところにある。

(46)『コリント人への第一の手紙』、第15章53を参照。

(47)『ヨハネ』、第14章6を参照。

(48)『ペテロの第一の手紙』、第1章19を参照。

(49)イエスのことを指している。

(50)聖母マリアのことを指している。

(51) sanctor.　エラスムスはこの用語をもって神のことを指している。sanctus という表記ならば、迷わずに“聖書の執筆者たちとか聖人のことを意味している”と判断するのだが、sanctor という表記であるので神を意味していると判断して「創造者」という訳語をあてた。

(52)聖書を意味している。

(53)『ヨハネ』、第8章1～11を参照。

(54)ピュラデス(Pylades)とは、ストロピオスの息子であり、オレステスの親友である。

(55)オレステス(Orestes)とは、アガメムノンとクリュタイムネストラとの間の息子であり、エレクトラの弟である。父を殺害した実母とその情夫アイギストスとを殺したことで知られている。親殺しの罪で、一時、乱心した。ミュケナイ、アルゴスおよびスパルタの王でもある。

(56)ペイリトオス(Pirithous)とは、テッサリアのラピテス族のイクシオンの妻ディアから生まれた息子であり、テセウスの親友である。“ペイリトオスはゼウスの息子である”という説もある。

(57)テセウス(Theseus)とは、アテナイの王アイゲウスとピッテウスの娘アイトラとの間の息子である。“テセウスはポセイドンの息子である”という説もある。

(58)ダモン(Damon)とは、アテナイの音楽家である。

(59)ピュティア(Pythia)とは、デルポイのアポロン神殿の巫女である。

(60)プリニウス(Plinius Secundus Major : 25–79)の『プリニウスの博物誌』を踏まえている。プリニウス、中野定雄・中野里美・中野美代(訳)、『プリニウスの博物誌・三』、雄山閣出版、1986年。第37巻59(1510頁)を参照。

(61)上記の、『プリニウスの博物誌・三』を参照。鷲は第10巻18、獅子は第8巻56～58、豹は第8巻59～60、海豚は第9巻24～28、蛇は第8巻61を参照。

(62)原典では改行はない。ここの文章から、イエスの子供時代に関しての論述となったので、翻訳者の意志によって改行を設けることにした。

(63)『イザヤ書』、第7章14と第9章6を参照。

(64)『ルカ』、第1章、39～44を参照。

(65)『マタイ』、第2章16～17を参照。

(66)上掲書、第21章12～16を参照。

(67)『マタイ』の第19章13～14、『マルコ』の第

10章13～14、『ルカ』の第18章15～16を参照。

(68)『マタイ』、第18章３～４を参照。

(69)『マタイ』の第18章６、『マルコ』の第９章42、『ルカ』の第17章２を参照。

(70)『マタイ』、第18章10を参照。

(71)人間のこと、特に読者のこと、をエラスムスは指している。

(72)『マタイ』、第18章３。

(73)『ヨハネ』、第３章３を参照。

(74) puer.

(75) infantia.

(76)ペテロ(Petrus)とは、新約聖書に登場する人物である。

(77)『ペテロの第一の手紙』、第２章２を参照。

(78)『ガラテヤ人への手紙』、第４章19。

(79)『コリント人への第一の手紙』、第３章１～２を参照。

(80)聖書のことを指している。

(81) repuerascentia.